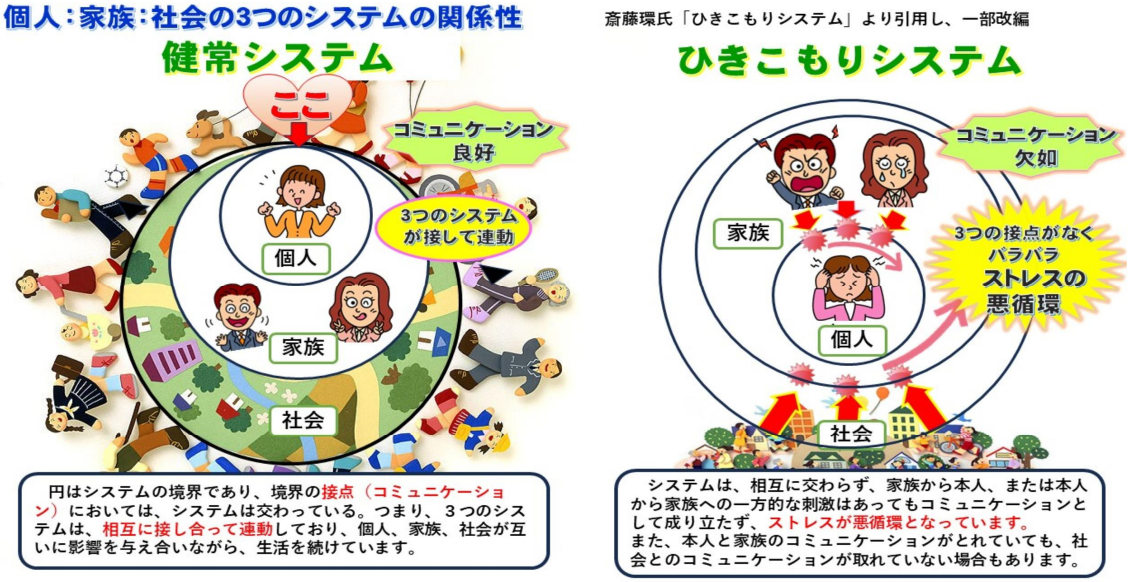
懐かしい未来新聞

発行：甲賀市
地域共生社会推進課
連絡先 内線1356
0748-69-2155

本号の紙面
★トピックス〝ひきこもり〟を理解しよう2
★話題　イノベーションサロン
★先進地から学ぶ　三重県名張市
★重層物語　シーズン3

〝ひきこもり〟を理解しよう　パート２

家族を最良の支援者に



円はシステムの境界であり、境界の接点（コミュニケーション）においては、システムは交わっている。つまり、３つのシステムは、相互に接し合って連動しており、個人、家族、社会が互いに影響を与え合いながら、生活を続けています。

システムは、相互に交わらず、家族から本人、または本人から家族への一方的な刺激はあってもコミュニケーションとして成り立たず、ストレスが悪循環となっています。
また、本人と家族のコミュニケーションがとれていても、社会とのコミュニケーションが取れていない場合もあります。

「８０５０問題」という言葉に代表される様に〝ひきこもり〟は、本人だけではなく、家族も支援の対象となります。

家族の中に、ひきこもりがちでそれが長期化するものがいることを想像してみてください。

たいていの家族は、不安や焦りのなかで、本人に対して、叱咤激励し、説教をしてしまうかもしれません。しかし、これは一方的なコミュニケーションであるため本人にとっては、プレッシャーやストレスになり、ひきこもりを助長する悪循環となります。

また、親の立場からは、自身の養育を後悔し、自責的あるいは他罰的になり混乱しがちです。家族の対応や姿勢と本人の〝ひきこもり〟を直接的かつ因果論的に結び付けた「親原因論」のような決めつけは有害であり、解決につながりません。

私たちにできることは、家族を追い込むのではなく、家族の苦しみや悩みに寄り添うことです。

大切なことは、家族が現状を受け入れ、本当の気持ちを語れる人が社会のなかに存在することです。家族は、本人の強さも知っている支援者です。

家族が、社会とコミュニケーションを持ち〝ひきこもり〟状態の家族（自分たち）を受け入れてもらえる安心感を感じてはじめて、家族も支援スタッフのひとりとして伴走できる大きな力となりえるのです。

先進地から学ぶ　三重県名張市

説明をする上田係長

市民ファーストのまちづくり

甲賀市〝地域共生チーム〟で、7月5日、三重県名張市役所に、視察に行きました。

名張と言えば、「まちの保健室」が有名で、全国的にもまちづくりのトップランナーです。

地域包括支援センターの上田紀子係長（保健師）からは「重層的支援体制の制度というより、これまで培ってきた〝市民主体〟の小規模ごとのまちづくりがベースで、それを整理し、統合しているだけ」との説明を受けました。

くわえて、「私たちは、市民のために、制度をぶち壊しながら進めていかないといけない」との言葉からも、市民ファーストの組織運営が伺えました。

帰りの車中では、一同が「甲賀市として実践あるのみ」と誓うのでした。

帰ってきた！みんなでe-こうか

イノベーションサロンの熱い夜

令和5年度は、市民グループ〝みんなでe-こうか〟と地域共生社会推進課とで協働事業に取り組んでいます。

去る7月19日に、甲賀市碧水ホールにて、市民らとイノベーションサロンが開催されました。

4つのテーマごとに、プレゼンするゲストをカフェマスターとして、30分ごとにローテーションしながら、3つのブースを聞けて対話するワールドカフェ的な参加型がみんなでe-こうか方式。

市民、福祉、教育、医療の専門職らを含めた約100名の参加者が久々の交流と学びを楽しみました。

今回は、ヤングケアラー問題、市民後見人制度、国際交流の現状、不登校児への訪問看護などのテーマでした。サニーデイズさんが取り組む「不登校と訪問看護」を聞いた参加者は、「『不登校児へのコミュニケーションを取りながら身体機能の回復も促す』視点に納得した」と話されていました。

文責：甲賀市役所　地域共生社会推進課　Ryuoh Maki

うまくいき過ぎた重層物語 SEASON３　前編

今回は、『ある対話から未来へ』と題して重層物語をお届けします。
地域共生社会を理解する助けになれば幸いです。

〇共田（ともだ）さん…　６７歳
妻（５９）と娘（２８）と３人で暮らしています。現役の頃には、建設業でバリバリと働いていましたが、５０歳過ぎた頃に精神的な不調によって、うまく会社に復帰できぬまま早期退職しました。現在は工場の夜間警備（週２回）で得た収入と年金で生計を立てています。妻は結婚して以来専業主婦で就労経験がなく、娘は大学卒業後、仕事を転々とし、現在は非正規社員として勤務しています。

〇生駒（いこま）主査…　３９歳
市役所職員。福祉部局に異動となり５年目。窓口対応や相談業務をしており、ややストレートな物言いでトラブルになってしまうこともありますが、相手の話を傾聴し、しっかりとした説明責任を果たすことをモットーに日々業務にあたっています。

「生駒さん、臨時給付金の件で、窓口にお客様がいらしてます。先日も来られた方だと思います」
生駒主査は部下にそう言われて窓口に向かいました。カウンターには、持参した封筒をごそごそしながら共田さんが待っています。
「お待たせしました。福祉課の生駒と申します」
「あんな、何で生活に困ってるもんに、この臨時給付金はあたらへんの？」
生駒主査が名乗って座るのを待たずに、共田さんは対象外と書かれた結果通知を机に叩きつけながら言いました。
「えーと、それはですねえ、受給対象外になられたということでしょうか？」
「そうや、その説明は前に聞いた。制度の理解はしたけども、どうしても納得でけへんから来てるんや」
「分かりました。納得のいかない部分を教えてください」
「そやから、臨時給付金は生活に困っている人を助けるお金やろ？　それやのに何でワシの家族は対象外になるねん。そら、ギャンブルに興じるとか、高価なもんばっかり買うとか、生活に見合わんことしとったら仕方ないやろけど、切り詰めて生活したうえで苦しいのに、対象にならんのはおかしいと思うわ」
「私もおかしいと思います」
「それやったら対象にしてほしいわ」
「制度の基準に従って運用していますので、それはできません」
「えーと生駒君か。あんたは制度の基準て言うけど、それで終わりにしたらあかんで。こっちの生活は続くんやから」
共田さんは生駒主査の名札を見て、名前を確認しながら、不満気に言いました。
「確かにそうですね。制度の基準数値だけでは測れない困りごとがあると思います」
「そういうことや。所得は何円未満、検査結果は何点以上、何でもかんでも数値や。臨時給付金も、介護認定も、障がい認定も、生活保護も、全部そうちゃうか」
「確かにそうですねえ」
「そうですね～やあらへんで。数値やなくて、ひとの暮らしを見んかい」
「しかしですね。様々なサービスや給付について、申請者の全てが対象となっては運用できません。やはり、基準となる数値を設けて、対象となる人とそうでない人を切り分けることが必要です。そうやって成り立ってきた社会ですから」
「生駒君な、成り立ってきた社会や言うけど、ワシらが頑張ってきた恩恵もあるやろ？ それこそ現役の頃は寝ずに働いたんや。『24時間戦えますか』っていうコマーシャルがあったくらいや。知らんやろ？」
「そんなビタミン補給ドリンクのＣＭは知りません」
「知ってるやないか。あの頃は、ワシらがこの社会を支えている感覚が確かにあったんや」
「言いにくいですが、支えているようで、支えられていた側面もあったと思います」
「あの頃ワシらが支えられていた？　どういうことや？」
共田さんは、きょとんとした顔で質問しました。
「ほぼ寝ずに働いていた現役時代、家事や育児は誰がされていましたか？」
「そんなもん、嫁さんしかおらへんやん」
「今の時代、働く女性が増えて、家事や育児に専念する女性は少なくなりました。それに婚姻率も下がっています」
「結婚するとかせんとかやなくて、ワシらは会社に、社会に、その働き方を求められたんやから」
「そうです。求められましたし、支えられてもいました。終身雇用制度が機能する中で、福利厚生も充実していたでしょう。その頃は経済も右肩上がりで〝これからもっと成長できる〟といった手応えと希望がありました。しかし、今の経済は右肩下がりです。新しくできた会社の９割が10年ともたない時代です。非正規雇用も増え、仕事がいつなくなるか分からない時代です。私たちは何を支えにして頑張ればいいでしょうか？」
「ワシに聞かんといて。こっちが相談に来てるんやから」
「24時間働くことは大変だったでしょうが、今はやろうと思ってもできません。その環境は専業主婦という存在や、右肩上がりの社会的な安心感に支えられていたんです」
「わかった、わかった。あの頃のことはもうええ。大事なんは今の臨時給付金や。今、ワシは支えられる側で、あんたらは支える側なんやろ？」
「いや、そもそも『支えられる側』『支える側』という二分法では成り立たなくなってきたと感じています」
「成り立たへんっておかしいやろ？　なんや二分法で。難しいこと言うて」
「数値を基準にして、『あなたは支えられる側ですよ』『あなたは支える側ですよ』って、決めつけてしまっていた部分があるといいますか・・・・・」
「ほんで？」
「そもそも、支える側と支えられる側なんて、くっきりと分けられるものではないですし・・・・・」
「そやから？」
考え込んでしまった生駒主査の顔を見つめながら、共田さんは返答を待っています。

（作　中井浩喜）